

天眼鏡

## みどり戦略に畜産はどう取り組むか

農本誌8月号で「みどり戦略と畜産」と題して、この5月に農水省が決定した「みどりの食料システム戦略」について、その概要と畜産に関係した取組項目を紹介した。そうしたところ、ありがたくも、その記事を見て、農水省畜産局から「持続的な畜産物生産の在り方検討会の中間とりまとめ」を行っているとの連絡をいただいた。みどり戦略を踏まえて「畜産物生産の在り方」を整理したもので、せっかくの情報提供であり、前回の補足という位置づけで、そのポイント等について紹介してみたい。

この中間とりまとめは6月24日に公表されており、みどり戦略が決定された5月12日から40日程しか経過していないが、年明けの1月18日には第1回の検討会が開催されている。みどり戦略の大枠が見えてきた段階で検討会を開始し、決定されたみどり戦略の中身を踏まえてとりまとめられたものだといえる。

Ⅰのまじめでは、畜産分野として地球温暖化対策をはじめとした、持続的な食料システムの構築に向けた取組を関係者に促すことを目的にしていることを明らかにしたうえで、Ⅱの基本的な考え方として次のような課題解決に向けた取組(=戦略)があげられている。

- 1、環境負荷軽減に取り組む(家畜改良による生産能力の向上、飼料給与、飼養管理の改善)
- 2、家畜衛生・防疫の徹底(飼養衛生管理基準の遵守や水際での防疫措置)
- 3、家畜の飼養管理等の省力化・精密化(AIやICTなどを活用した機器の生産現場への導入促進、利用拡大や生産データの収集とその分析結果の利用による飼養管理等の精密化)
- 4、自給飼料生産や耕種農家との連携による資源循環  
(良質肥料の生産や堆肥の広域流通を通じた、自給飼料生産や耕種農家との連携による資源循環)
- 5、飼料自給率の向上により輸入飼料に依存した構造からの転換(国産飼料の生産・利用及び飼料の適切な調達)

### 6、生産現場の努力や消費者の理解醸成

(有機畜産、その他の畜産物生産における持続性に関する取組(薬剤の使用低減や食品衛生、家畜衛生、労働安全や人権の尊重、アニマルウェルフェア、畜産GAPの認証取得等)、生産者の努力促進、消費者の理解醸成)

続くⅢは戦略に基づく具体的な取組で、

- 1、家畜の生産に係る環境負荷軽減等の展開(1)家畜改良、(2)飼料給与、(3)飼養管理、(4)家畜衛生・防疫
- 2、耕種農家のニーズにあった良質堆肥の生産や堆肥の広域流通・資源循環の拡大
- 3、国産飼料の生産・利用及び飼料の適切な調達の推進
- 4、有機畜産の取組
- 5、その他畜産物生産の持続性に関する事項

の各項目について「取組みの現状」を踏まえて「今後行うべき取組」があげられている。

ところで、みどり戦略自体は積み上げ方式ではなく、2050年の姿を目標とするバックキャスティング方式で作成しており、目標実現はイノベーション頼りの感が強い。これに対し本中間とりまとめは「既存の現場の取組も含めて畜産分野において今後行うべき取組を再整理したもの」とされている。それだけに具体的で現実的ではあるが、放牧や有機畜産、アニマルウェルフェア等も含めて数値的な目標や工程表が示されていないこともあって、畜産構造の見直しを訴える迫力は乏しい。

畜産分野由来の温室効果ガスの排出量は農林水産分野の約3割、日本全体の約1%を占める。この先の具体化こそが肝心であるが、畜産局の話では中間とりまとめで終わりとのこと。実質的に課題提起で終わっているのは残念だ。あらためての「最終」とりまとめを期待したい。

(農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一)